

地球惑星科学における男女共同参画

Equal Participation of Men and Women in Earth and Planetary Sciences

尾池 和夫[1]

Kazuo Oike[1]

[1] 京大・理・地球

[1] Gradu. Sci., Kyoto Univ.

今の私の仕事では、さまざまな企画の責任者から行事への参加依頼がある。しかもそこで何かの形で話をしなければならぬということになる場合が多い。この1年以上何とかそれをこなしてきたけれども、今回は前田佐和子先生から上のような課題をいただいて困り果てた。何を話せばいいのか、にわかには判断できなかった。

京都大学大学院理学研究科の地震学研究室に、1988年12月から2003年12月までいて、その間にあった出来事の中で、私が真っ先に紹介したいことは、研究室のメンバーの中から、南極昭和基地に初めて女性の越冬隊員を送り出したことである。私が仕組みだわけではないが、研究室での何気ない会話の中からその歴史が発生したことも確かである（文献1）。

そもそも南極昭和基地は、おどろくべき男性社会として生まれ育ったように私には見えていた。自分が学生のときにあこがれた越冬隊のことを、西堀栄三郎さんの本（文献2）で読んだり、隊員だった地球科学分野の先輩たちから聞く話で、男性社会の現実に触れた印象が強かったからだろうと思う。

女性が越冬するには関係者の意識改革から基地の整備まで、ずいぶん多くの努力が長期間にわたってなされたと思う。そして東北大学から坂野井和代さんと京都大学から東野陽子さんが、1997年11月から1999年3月の期間、第39次南極観測隊に参加した。1957年1月29日、永田さんが昭和基地と命名して始まった日本の南極観測で、越冬する初めての女性たちだった。坂野井さんは、越冬したとき結婚しておられたし、東野さんは今では2人の子育てをしながら、仕事しておられる。

東野陽子さんが参加するにあたって、その準備のための人事を行う会議で、ようやく昭和基地にも女子トイレができましたと報告したら、その後ですぐ、京都大学の天文台に女子トイレがないのを、研究科長として知っているのかと職員から問われて絶句してしまった。このことも京都大学の中での男女共同参画のことを考えるきっかけになったのかもしれない。

毎年私は干支をテーマに年賀状の絵を描くが、2005年は1万円札の鳳凰を反転して対に直して、鳳と凰とで男女共同参画社会の実現を願った。子育てをしながら地球惑星科学に挑んでいる東野陽子さんに、大学でも保育所を充実しようかと意見を求めたら、遠くから通っていて、職場の保育所に連れて行くより、近所の保育所を利用する費用をもらう方がいいと言われて、なるほどとまた考え込んでしまった。しかし、外国人の大学院生も利用できるような保育所を京都大学に作りたいとも思っている。

こんなことを考えながら、いくらかの時間をいただいて表題について話をさせていただこうとようやく決心したのは、この原稿の締め切りの直前であった。この機会に私自身も表題について学習を深めさせていただこうと思っている。

文献1：坂野井和代・東野陽子、「南極に暮らす」（岩波書店）、2000年

文献2：西堀栄三郎、「南極越冬記」（岩波新書）、1958年